

南里亭其樂編
好花堂野亭校
「復讐讐通箭」について

横 山 邦 治

はこれ以上の出版事情を知り得ない。

二

「日本小説書目年表」では、「出版年代未詳部」に、
○復讐讐通矢 七 楠里亭其樂
東南西北黨
と著録され、「以後大阪出版書籍目録」では、

○復讐讐通箭 六冊

作者 南里亭其樂 (江戸)

板元 河内屋嘉助 (博労町)

出願 文化十四年五月

許可 文化十五年四月七日

と著録されている読本がある。

この読本は、作者である楠里亭其樂についての詳細な調査研究をされた長友千代治氏の報告「楠里亭其樂年譜」(大谷篤蔵編「近世大阪芸文叢談」所収)で、「以後大阪出版書籍目録」に依って、文化十四年五月刊と記録されている。そして、「所見本は刊行年不明のため、その出願期日を以って掲げた」とされ、氏の所見本は、六巻六冊、出版書肆名は京の大文字屋与三兵衛と浪速の河内屋喜兵衛の連名という。これは、ともに出願者である河内屋嘉助とは別人であり、さらに刊年なしとすれば、後刷の一本であろう。(注一)

「国書総目録」にも、所蔵する図書館なきことを示しており、今

近時購入した「復讐讐通箭」は、六巻七冊の形態を有するもの、「日本小説書目年表」にある「七」と一致するが、これは、巻五を十四丁までを「巻之五上」とし、十五丁以下廿八丁までを「巻之五下」として分割した結果生じたもので、巻之五下巻頭の内題「復讐讐通箭卷之五下」が後に補刻したもので、しかも他の内題下には必ず見られる「東武 南里亭其樂編 好花堂野亭校」という作者名が見られない、というよりも、こうした内題を入れる余白がない板下であることから判るように、出版頭初からの形態でないごとくである(注一参照)。とすれば、これも後刷の一本ということになる。

ただ、この本には刊記が見られる。最終冊の巻之六の巻末十六丁ウに広告あり、横綴本大冊全一冊という「商家 手紙大全」と並んで「江井 楠八 必用家 無雙相繫語」(浅山晋国画で五冊「寅正月売出し仕候」と予告する、刊記には「文化十四丁丑年十一月発行」とあり吉野屋仁兵衛(京) 前川六左衛門(江戸) 永楽屋東四郎(尾張) 河内屋嘉助(大阪)の連名であるが、見返しに京撰書林発行とあり、河内屋嘉助主導の出版であつたろう。なお巻末に「復讐讐通矢」の

予告が見られる。〕「絵本新編東夷記」(速水春曉齋画で十冊、

寅歳秋出版)と予告するが、刊否未詳。題名の類推と作者名から「鎌倉絵本平泉実記」のことかとも想定されるが、冊数も刊年も異なるので不明とする外ない。〕「絵本木曾義仲記」(東南西北雲画

で十冊、寅歳冬出版)とあるが、刊否未詳。〕という読本三部の予告らしきを載せる、この丁は原板と思われるものである。次に、裏表紙の見返し部分に、杉岡石倉堂蔵板軍書目録」とあって、「重編応仁記・廿」など十八部にわたる古くからの軍書目録があるに続いて、

○文政六癸未年正月

大阪書林 心齋橋通博労町北エ入
河内屋長兵衛

との刊記が見られる。この部分の広告および刊記には、埋木などした形跡は見られないので、この部分を全て新たに刻して再板したものであると思われる。

これを要するに、寅歳出版の予告した十六丁ウの部分は、寅歳の前年即ち文化十四年より以前に出版した時の広告がそのまま残ったもので、裏表紙見返し部分の広告・刊記は、文政六年再板した時のものということになるであろう。

とすれば、この「復讐響通箭」なる読本は、恐らく文化十四年に河内屋嘉助から七冊本として出版されて後、刊記なき巻之五上下合冊の六冊本が河内屋喜兵衛から再板、その後文政六年に河内屋長兵衛の手により再々板、さらに刊年なき七冊本が刷り出された(「日本小説書目年表」に著録されたもの)ということになり、少なくとも四度出版された読本ということになるであろう。現存する本は少ないように思われるが、案外流布した読本であったのであろう。

三

「復讐響通箭」の内容は、題名どおり三十三間堂の通矢の故事を仇討話に仕立てたものであるが、一応その梗概を記す。

「略」往右相州鎌倉の武備盛なる頃弓馬をもて業とするものは治平といへども丑世を忘れざるの一助なり。それが中に弓を射て身命を失ひ家禄を絶せしものと。射術をもつて身を立家を興し名を後世に傳へし者あり其始末忠あり義あり曾孝貞全くして信を失せず。善惡応報の速なる語を古老の説傳へるを是彼綴合して悪きを懲し善を勧るの棧道となしぬ。」

と前説して本題に入る。北条泰時執権たりし時、三浦郷垣木邑に堅助という猛者がいた。浪々の身で狼を業とす、一女松が枝は和田義盛に仕え、懷妊して宿下り、ある日狐に出て帰りのおそい堅助を心配して迎え出た松が枝を雷火がおそい焦殺、堅助驚き見れば嬰兒が生れている。雷児と名付け育てるに、行作勝れるも殊に弓術に秀れている。雷児は堅助の没後三浦家に仕え、多田雷八成孝と名乗る。(和田氏の落胤なれども、和田一門滅亡後ゆえに憚って多田という。そして、和田滅亡を無念とし、北条を亡ぼし天下の権をもうかがう。)

安貞元年八月十五日鶴岡八幡の祭礼の流鏑馬に三浦安村も射手に選ばれたが、臣雷八の妙手を自慢、雷八衆人の面前で小鳥を引目に射込む妙技を示す。安村、流鏑馬の射手に雷八を推すも、泰時は弓術の名人たる家臣越野丹左衛門祐時に相談して、倍臣にその例なしと退ける。安村怒って泰時を討たんと雷八に謀るも、雷八はせいては事を仕損ずると、武將頼経に讒言して泰時を陥し入れる謀計を語る。安村、雷八の舌頭にのり、頼経が三浦に御遊の時、泰時の心をとろ

かさんと大磯の遊女浅幾久に歌舞をさす。何故か、浅幾久は安村に近付く。(巻一)

安村、浅幾久に恋慕、雷八は浅幾久身請けのことを謀る。松和屋の亭主は、浅幾久の重みだけの黄金で身請け話を承諾し、浅幾久に迷い子たりしことを告げて、その時身に付けていた守袋を渡す。浅幾久は、相思相愛の越野柔造祐国に事の成り行きと他に心を許さざることを文にしたため、守袋とともども禿に手渡しを依頼し、泣きの涙で廊を出る。雷八の屋形に至り、雷八の妹花鳥という名目で安村の妾となることを強請されるも、安村の泰時に対する悪謀を憎んで三浦御遊の時意に従わなかったこともあり、祐国への心中立てもあり、安村と雷八の意に従わない。一方、浅幾久の貞節に感じて松和屋に止まる祐国のもとに黒髪を封じた便りがあり、監禁される身として此の世では会えないという。祐国は花鳥のもとに忍んで救出せんとして兩人とも捕えられる。(巻二)

雷八、祐国浅幾久を拷問、祐国の子を宿していた浅幾久は悶死、祐国は一人の番兵の好意で簀巻のまま水門より屋敷の外に流される。喜久名村の東六という漁師、海中に祐国を救う。東六の亡父喜太介は、もと越野家に仕えし人で祐国と主従関係あることが判り、祐国をかくまう。東六の留守中、雷八の家来軍太は、祐国と東六の老母を殺害、現場に残された金銀造りの簀を手がかりに主と母つ仇を討たんと誓う。簀と祐国の守袋をもって鎌倉に向う途路、二の瀬村にて地震に遭い、東六は土葬された浅幾久の腹から生を享けた赤子を拾う。一方、頼経卿の御父中納言基良卿の北の方が、物の怪におそわれるのを防ぐため、曇目の法を行わんとするのに、弓矢の達人たる多田雷八と越野丹左衛門に命ぜられる。泰時は越野を召して水破兵破

の神箭を与え、功を立てるように命ず。越野、妻戸由良に後事を托し、雷八と兩人京に上る。越野上京後鎌倉に着いた東六も後を追う。

兩人京到着後怪異なき徒然に、雷八は三十三間堂の矢数せんと越野に申し込む。越野心染まぬながら承諾、天下の評判となる。(巻三)

越野丹左衛門・多田雷八の矢数比べは、已刻より申刻まで、丹左衛門の総矢一万四千六百筋で通し矢七千九百筋、雷八の総矢一万三千五十余筋で通し矢は八千百三十筋と栗振の判定、雷八の栗振買収のせいかと疑うも証なく、丹左衛門樂します、が一大事は望月家の妖怪退治と神箭を探せど盗まれて見えず、三通の書置を残して切腹す。下人弓助への書置には妻戸由良と力を合せ息祐国を探し出して宝箭の行方を詮議し家名を継せよとある。弓助鎌倉に下る。越野自滅後、雷八一人で怪異を除き今源三位を称される。頼経卿雷八を賞して直参に加えんと欲すれど安村固辞、雷八は泰時を護する好機であったことを言い、安村の浅慮を嘆く、兩人密謀。一方、弓助は戸由良に従い神箭探索に立立、美濃国青野原にて戸由良は乞食(雷八新参の家来専平の謀計)の難に遭い落命、弓助一人にて主命を果さんと決心する。赤坂の宿外れで、東六と邂逅、ともども往事を語り悲嘆、祐国浅幾久の遺児を護り立てんと誓う。ともども弓助の故郷大和国十市の里に向う。雷八、安村に説いて雲和尚なる行力抜群の荒法師をかかえる。(巻四)

大和国、宇陀の長に郡治という富家がある。郡治は、雷八の腹臣獅子垣軍太が宇陀の長の没後入夫したるもので、長の後家は、軍太入夫後三月で先夫の子を生む。小牧と名付け、郡治(軍太)は寵愛する。郡治は吝嗇にして豪富となる。弓助と東六は、幼主ともども弓助の妹賤家の住む十市の里に住む。賤家と東六婚姻し幼主震太郎祐

小牧の病因を知らない郡治は、雲海に祈禱を依頼、小牧快癒を喜ぶ。震太郎は小牧と逢瀬を重ね、互に肌の守を交換する。それより糸口はぐれ、祐国殺害現場に遺棄された筈と対の筈を見出し、郡治を敵という、小牧目害せんとする。そこに躍り出た郡治は、小

牧の持つ刀を腹に突き立て、今までの経緯と悪行を告白する。ますます震太郎が持っていた浅幾久の遺物たる肌守から、郡治が責め殺した浅幾久は、荏柄平太為長の臣たりし郡治が窮して棄子した娘であることが判り、震太郎は孫に当ること、北條に仇せんとする雷八と組んだのは、主君為長の遺恨をはらさんとする志が一致したからであることを語り、望月家の物の怪が雲海の術によることや矢数勝利の裏工作、宝箭を盗み出したことなど全て雷八の悪謀によることを告白、雷八を討つためには雲海を捕えて罪状を明白にすべきことをいい、忍術使いの雲海捕縛の方法を教える。そして、宝箭を小牧の結納として与え、震太郎妻小牧に仇討されたとして死ぬ。(巻五下)

鎌倉に着いた震太郎主従は、善覚院に至って、郡治の計に従って雲海に近付き捕縛、泰時公の面前に連れ出し悪謀を白状させる。寺

雷八の策謀におどらされた三浦安村の北條氏覆滅の陰謀があつて史伝ものの的に話が大きく展開しそうで尻すばみに終つており、結局は三十三間堂の通し矢の功名談を種とした仇討話、いうに止まる作柄の読本である。越野丹左衛門は星野勘左衛門を、多田雷八は和佐大八を、それぞれもじつて命名しているところからも、話の種は割れてゐるのである。ただ、元来功名談にすぎなかつた話を、どういふ手順で仇討話に仕立てたのであろうか、問題なきにしもあらずである。

序文に次のように見える。

一略^{いつしやく}予^よ曾^{そう}而^に南^{なん}漢^{はん}に杖^{つゑ}を曳^{ひく}
 村^{そん}老^{らう}の昔^{むかし}語^がを聞^き書^き
 せしが頓^{とん}に一^{いち}帙^しのとぢふみと成^{なり}しをこたじ
 紅^{こう}花^{くわ}堂^{どう}の校^がを
 得^えて梓^しにゑり題^{だい}して誉^{はまれ}の通^と矢^やてふものハ一略^{いつしやく}

「南溟」というのが何処を指すのか、星野・和佐両氏の出身藩たる尾州か紀州を指すには相違あるまいが、南海の太守などいえば紀伊の殿様を指すこともあったようであるから、ここでは紀州を指すのもあろうか、いづれにしても「村老の昔語を聞書」したというのである。巻之一巻頭部分にも、「略一善惡忠報の連なる語（もの

かたり)を古老の説伝へるを是彼綴合して悪きを懲し善を勧るの棧道となしぬ。〃と説く。こうした表現をしている時は、多く実録本を種本としていることは従前の諸例で明らかであるが、寡聞にして後には講談でも語られた寛永三大武術の一たるこの競矢を種とした実録本の存在を知らない。まして、このような仇討話にまで発展させた実録本の存在しようもないのである。

もっとも、星野・和佐両氏による競矢の事跡については、当代の隨筆雜記類に数多く著録されており、殊に実録狂神沢貞幹の「翁草」には、注目すべきことが記録されている。今、やや長文にわたるが再録する。

星野勘左衛門和佐大八の事

矢數の事、濫觴は淺岡平兵衛と云ふ士、慶長十一年、洛の三十三間堂に於て、其弓勢を試初しより、相續いて是を勵み試む事になりて、晝夜矢數と云ふ事始り、其道の達者、追々に先輩の通矢を射越て、是を總一と號す、世の諺には、弓の天下と呼ぶ、慶長より六十餘年を経て、寛文の頃、吉井助之丞、長屋六左衛門、杉山三右衛門、高山八右衛門、吉見臺右衛門など、其世の精兵、互に總一をいどみ諍ふ、爰に尾州の家士星野勘左衛門、寛文二年に、六千六百餘の通矢を射て總一をとる處に、同八年紀州の家士、葛西園右衛門と云ふ者、通り矢七千餘を以て總一を、紀州方へ取返す、星野聞之て、此度は國元よりは、八千の幟を榮させて持參し、寛文九年五月朔日、暮前より射かけ翌二日午刻迄に、通矢八千本を望の通り、容易く射上ぬ、猶も射るべき餘裕有れども、さのみ射越なば、後日他士の望を失ふべし、然れば弓道の衰微に以たりと、爰に止まりぬるこそ、寔に英雄の志なれ、斯て星野は矢數終て、

右の福として、京都所司代町奉行へ騎馬にて勤廻り、其馬を南頭に振向て、直ぐに島原の遊里に趣き、夜と俱に妓婦に戯れ酒を酌む、其活氣宛も平日の如し、見聞人美談せずと云ふ事なし、然してより十餘年の間は、總一尾州の方に止り有しを、貞享の頃に至り、紀州家士和佐大八、頻て是を望み、稽古に身を委ねて、寛に貞享四年四月十六日、晝夜矢數を張行し、總矢一萬三千餘、通矢八千百三十三筋の榜を揚ぐ、

説に曰、此時大八郎、十八九歳、未だ角前髪の大兵にて、力衆人に越て強勢なり、然るに、當日の射掛り矢振りあしく、通り矢甚少し、斯ては願望空からんと、各堅唾を飲む所に、尾州の棧敷に、星野勘左衛門見物して有しが、情見て思ひけるは、あたら若者、何とぞ願望を遂させ、弓の總一を譲らばやと思ひ、色々工夫して、大八を招き、左の手を開かせ、小刀を以て掌内を突破り、血を留させ、其の後射させけるに、夫より忽ち拍子直りて、竟に八千餘の通り矢と成りぬ、星野が工夫、凡慮の及ぶ處に非ず、此星野永く世にあらば、また「總一」を射べきに、惜い哉、夫より程なく星野世を去りぬれば、其後も度々大矢數張行の人は有れども、是を射越す程の精兵なし、其比迄は、總一他家にはなく、尾州紀州の御兩家より、互に競諍ひて、是を取返し、又取返され、此勵み専ら成けるが、大八以後は、其沙汰止て、年久しく成りぬ、其後柳澤家、權勢熾ん成し頃、右家中米田新八後内と云者、是を望み、數度大矢數を企しか共、竟に本意を不遂、明和の今に至迄、曆數八十餘年の間、總一は紀州の御家に殘る、此和佐大八は尤も總一を射たりといへども、其、術、星野とは雲泥の違ひなり、星野は其寛寛優に餘裕有て、箭引に

は良久敷熟睡して鋭氣を養ふ、諸人は是を見て、斯ては時移り望を失むと、各取々に評する處に、起上りて射出す所の矢勢、疾風の如く、其矢悉く闇みの所を抜て、落矢は稀れにも無りしかや、斯くして、本文の如く、午時に至る程に、射上げゝるとな、其世の翁の語りし、是に反して、和佐が矢には、振込多く、蹇の通り矢は少なかりしとぞ、是堂見の方へ、賄賂する故なりと惡説せり、其上、末に至る程、次第に射前をにじり出で、堂檐の半ばにて、射たりとて其頃甚評判惡しとなり、實も射前を動出るは、通矢の差別大に違ふ事なれば、惡みけるも理りなり、去に仍て、和佐以来射前に證據本と號して、關貫を入れ不作法を制止す、

ここに顯著なのは、競矢の勝者たる和佐大八の惡評である。「異説まちまち」に、

○——略——然るに其派ならぬ者は誹りていふ。大八郎堂前の時は、射毎に少しづゝ前へゆすり出たり。夫故間數も近く成たりと云。真偽不弁といへども、二間とは延びまじきにや。夫に一万三千余を射出し、八千百三十三筋ほどの通り矢にて、騎馬にて帰りけんいとおびたゞし。間然する事有べからずと思わる。のちにいかなる罪かありけん。紀州の内にて、外島の如き所へ放逐せらる。

とあり、惡評を「其派ならぬ者」の誹謗だという。が、ここでも、後のこととして罪を得たことをいう。

仇討話を作りあげる場合、善惡が明らかでなくてはならないこと当然である。普通の実録種の仇討話は、最初から討つ者と討たれる者が決まっているから、討つ者を善にし討たれる者を惡として筋立

てすれば万事解決、後はそれに綾を付けていけばよい。しかし、星野和佐両士の競矢のように、元來仇討話でないものを仇討話にするためには、どちらかを惡人としなくてはならないわけであるが、前述のごとき巷説があれば、和佐大八を惡人に仕立てるに好都合ではあつたらう。こうした和佐大八に対する巷間の惡評が、この仇討話を仕立てる種になっていることは言えそうである。

「村老の昔語」というのが、この巷間の流説を種として、どこまで仇討話に仕立てていたのか今は知るよしもないが、雷に打たれ死せし松が枝の胎内より生を享けたという、巻頭の雷八出生に関する説話、そして巻之三で同工異曲と言つてもいい地震であばかれた土葬の淺幾久の死骸から胎内の小兒を救う説話、この巻之三には、

○斯る例は周の雲仲子雷鳴の後あはけたる塚に赤子をひろふ生長して雷震と号せしかや和漢古今の隔はあれど正しく同じ支かなと獨ごちて云々

とあって、中国の故事（今この原拠がどこにあるか探り得ないでいる）に付会しているらしきことを白状するが、これは中国種の説話に付会して想を展開することを第一義的に考えている本格的な読本（私流に言えば稗史ものの読本）と軌を一にした方向を示した方法であり、読本作者としての南里亭其楽もしくは校合者たる好花堂野事の意の加わつたところと思われ、「村老の昔語」に読本作者として手を加えた部分が相当程度あることを示唆しているようである。

そうした目で見えていくと、冒頭の鎌倉の由来を説くところとか、同じく巻一の養老に見られる雷八が安村に泰時を陥れるために淺幾久を枕席に進めんと謀る時に王允の故事を引用したりするところなどなど、各所に其楽もしくは野亭の手が加えられていると思われる個

所は数多く指摘できそうである。

とは言え、こうした構想上の添加もしくは加筆が、稗史ものの読本とする上に十全の効果があつたかと言えば、必ずしもそうではなさそうである。例えてみれば、冒頭雷兎出生の説話にしても、これが曲事馬琴であつてみれば、全体的構想の中に因果關係を持たせながら發展させていったに違ひなかつたけれど、ここでは単に挿話的役割しか果していず、全体的構想の上から言えば、話に部分的に綾を付けた程度のものであつた。巻四で、頼経卿が雷八を直参にせんとして安村固辞、雷八は直参になれば何かと讒言して泰時を陥れたのにと安村の浅慮をなじるが、その後密謀数刻ありとする。しかし、この密謀なるものは、その後一向に有効な展開を見せておらず、確かに雷八の悪謀臣たることを印象付ける記述ではあるが、構想上は無に等しい挿話に終っている。一事が万事で、浅幾久の所持した肌の守という小道具の扱いにいかほどの工夫を見せる以外は、稗史ものの構想の展開が乏しいと言える。

このように見てくると、「村老の昔語」にならずで、十全に稗史ものの読本に昇華させ得なかつた其案もしくは野亭の、読本作者としての限界を示している作柄の読本と言えるであらう。このことは、末期の上方読本の在り様をも反映した読本と言えるのである。

五

「復讐響通箭」という読本の紹介を終る。実録種に近いとも思われるこの読本について、その種探しができればと思つただけだと不発に終つた。今は、かつて調査した好花堂野亭（注二）の読本群に、校合者としてこの作品を追加し得ることを報告し（この外にも数多

く存在するであらうが）、更には南里亭其案の読本の在り様の調査報告を約して、この稿を終る。

注一 学習院大学所蔵本の「復讐響通箭」の刊記に、河内屋喜兵衛大文字屋與三兵衛の名を見る。巻末広告があつて、文政六年求板本の「無讐相鬻語」などの広告と同じであつて、杉岡石倉堂の蔵板目録は見られない。当然、初板と文政六年求板本との中間に出版された本であることは明白である。ただし、六冊本ではあるが、卷之五上と卷之五下が合本となっている形で、文政六年求板本と同じ形の板下である。初板本「無讐相鬻語」の巻末広告に「復讐響通箭」を「全部七冊」とするので、初板本から卷之五は上下に分冊されていたものかも知れない。題目の字体・形式の不揃いが不審ではあるが。

注二 拙著「読本の研究」参照。（本学教授）

〔付記〕 何かと御好意を得た長友千代治氏に感謝します。